

小 学 校

平成 31 年度 (2019 年度)

教育研究員研究報告書

体 育

東京都教育委員会

目 次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の目的	1
III	研究の視点	2
IV	研究構想図	5
V	研究の内容	6
	1 調査研究	6
	2 検証授業	8
	〈ゲーム〉	8
	〈陸上運動〉	12
	〈水泳運動〉	14
VI	研究のまとめ	16

研究主題

三つの資質・能力を育む体育学習 ～学習指導要領に新たに示された運動の学習を通して～

I 研究主題設定の理由

文部科学省は、「小学校学習指導要領（平成 29 年 3 月）」（以下、「小学校学習指導要領」と表記。）において、現行学習指導要領の成果と課題を明らかにし、教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力を「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱に整理した。

小学校体育科においては、「体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を見付け、その解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成すること」が目標として示された。

小学校学習指導要領が告示されてから 2 年が経過し、本年度は移行措置期間の最終年に当たる。来年度より全面実施となることから、学校の状況を把握するため、「体育科の指導について」と「小学校学習指導要領解説体育編（平成 29 年 7 月）」（以下、「小学校学習指導要領解説体育編」と表記。）に新たに示された運動の理解と実践」の視点で、都内公立小学校 43 校、482 名の教員を対象とし、質問紙調査を実施した。その結果、「新たに示された運動のことを全て知らない」と回答した教員は、全体の 60%に及んだ。また、新たに示された運動の実践については、この 2 年間で「いずれも行っていない」と回答した教員が全体の 51%であった。これらのことから、小学校学習指導要領に新たに示された運動について、誰もが実践できるように指導事例を示すことが必要であると考えた。

以上のことから、小学校学習指導要領に新たに示された運動の学習を通して、体育科における三つの資質・能力を育む体育学習の実現を目指し、本研究主題を設定した。

II 研究の目的

本研究は、小学校学習指導要領に新たに示された運動の学習を通して、体育科における三つの資質・能力を育む体育学習の在り方を追究することを目的とした。

新たに示された運動のうち、「ボール運動領域における相手コートにボールを投げ入れるゲーム（低学年）」、「ボール運動領域におけるバドミントンやテニスを基にした易しいゲーム（中・高学年）」、「水泳運動領域における安全確保につながる運動（高学年）」、「陸上運動領域における投の運動（遊び）」の指導実践を通して仮説を検証することとした。特に、「水泳運動領域における安全確保につながる運動（高学年）」は、来年度から全校で実施する必要があることを念頭に置き、研究を進めた。

Ⅲ 研究の視点

本研究では、小学校学習指導要領に新たに示された運動の学習を通して、体育科における三つの資質・能力を育む体育学習の在り方を追究するために、『主体的・対話的で深い学び』の視点に立った授業の創造－「深い理解」の実現を目指して－（東京都多摩地区教育推進委員会第24次計画（第45年次）報告書）を参考とし、主体的・対話的で深い学びの視点に基づく「子供の学びの姿」が授業に現れるように、手だてを考えることとした。

また、「子どもの体力向上のための総合的な方策について（答申）」（平成14年9月30日中央教育審議会）において運動不足の要因として指摘され、広く周知されている「時間」、「空間」、「仲間」の「三間」という概念に着目し、体育の授業において大切にしたい、「時間」、「空間」、「仲間」の「三間」を切り口として授業改善の視点とした。なお、「空間」については、体育の授業における「場」を広く「空間」と捉え、「場づくり」や「教材・教具」も「空間」の中に入れて手だてを考えた。

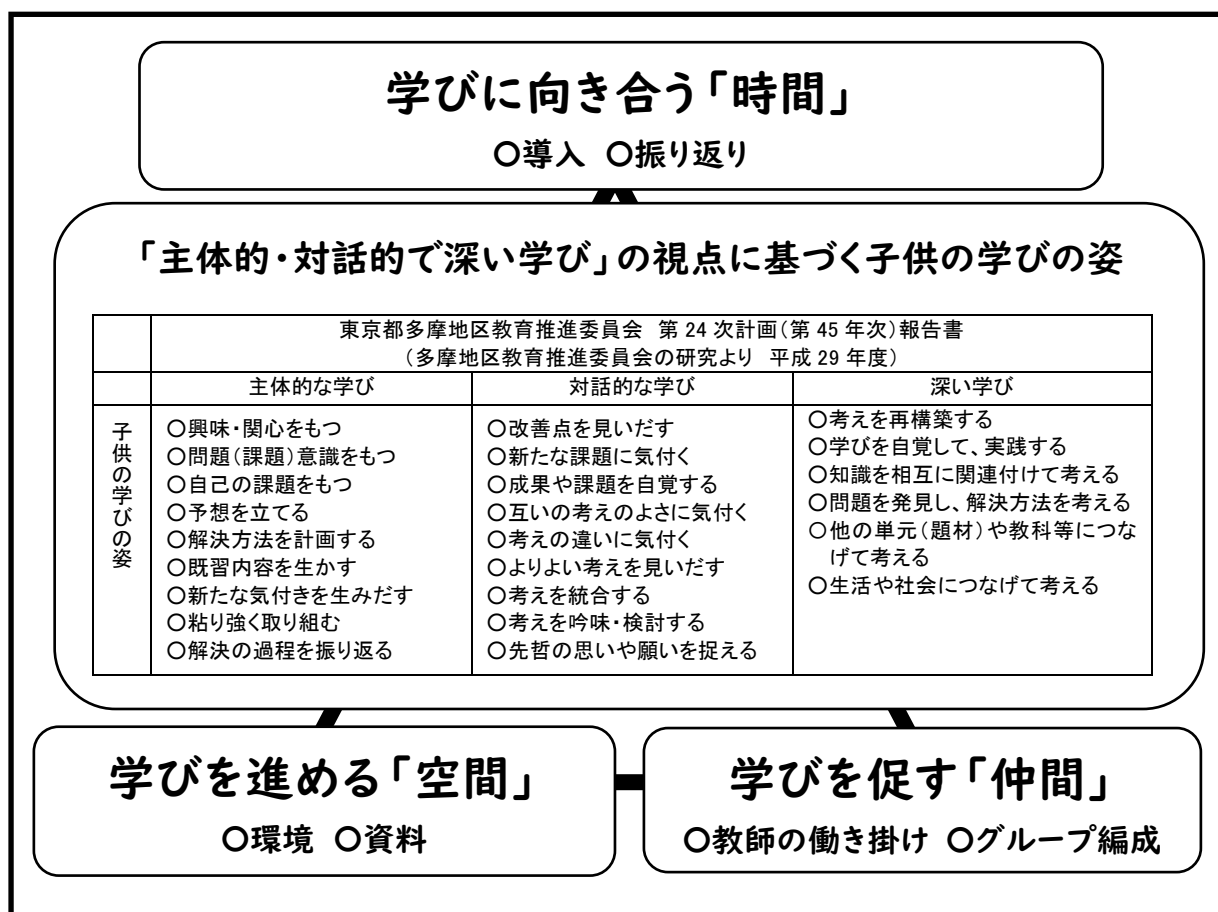


図1 「主体的・対話的で深い学び」の視点に基づく子供の学びの姿と「三間」の視点

1 学びに向き合う「時間」

(1) 課題を見付ける導入

導入時に、映像や資料等を使って、教師と児童がゴールイメージを共有することで、児童一人一人が「これができるようになりたい」、「こういう力を身に付けたい」などの目的意識をもてるように工夫する。また、その姿と今の自分とを比較して、児童自身が課題

を見付け、課題解決に向けて取り組んでいけるよう、学習カード等を利用し、単元全体の見通しをもてるようにする。初めて出会う運動では、実際にやらせてみてから課題解決の道筋を想像したり、既習の運動と関連付けたりして児童が主体的に課題を見付けることができるように工夫する。

(2) 考えを再構築する振り返り

毎時間の学習においても、児童自身が、「今日は何ができるようになったか」、「何が身に付いたか」を振り返り、個々の課題解決に向けて考えを再構築できるようにすることが大切である。一単位時間の中で適切なタイミングで自分の課題や解決のプロセスを振り返ることができるように、児童が考える場面設定と教師の発問を精査し、運動して分かったことや他者との対話によって気付いたことを基に児童が自分の考えを再構築できるようにしていく。

2 学びを進める「空間」

(1) 児童の実態に合った教材や場の工夫

運動の特性に触れ、運動の楽しさを十分に味わわせることができるよう、児童にとって行い方が分かりやすく、興味・関心をもって、粘り強く取り組むことができるような教材を工夫する。

また、児童が自己の課題を解決するために、運動の場を選択できるように工夫したり、運動の特性に触れながら、児童が今もっている力で楽しむことができるようにコートの広さなどを工夫したりする。

(2) 課題解決の手助けとなる資料

児童が活動する学びの場に、自ら改善点を見いだしたり、新たな課題に気付いたりすることができるよう、動きのポイントと自己や仲間の動きを照らし合わせることができる資料や課題解決のヒントが示された資料等を用意する。

3 学びを促す「仲間」

(1) 教師の働き掛け

児童が新たな課題に気付いたり、自己の成果や課題を自覚したりすることができるように、教師の発問を工夫する。また、児童同士が互いの考えの良さに気付いたり、より良い考えを見いだしたりすることができるように、発表の場面を工夫するとともに、児童が考える場面を設定するなど、教師が適切な働き掛けを行い、児童の学びを促す工夫をする。

(2) グループ編成の工夫

児童が自分の考えを伝え合い、考えの違いに気付いたり、課題解決のための改善点を見いだしたりすることができるよう、グループの人数や構成を工夫する。特に、グループを構成するメンバーについては、技能差を同質にし、考えを吟味・検討することができるようにしたり、異質にすることで、新たな課題や考えの違いに気付いたりすることができるように、児童の学習の深まりに応じて意図的にグループを変えることで、児童が対話を通して主体的に学ぶことができるように工夫する。

アイコン



手だてである「三間」の
視点を示す。



学びに向き合う「時間」



○課題を見付ける導入

導入時で、児童一人一人が学習のゴールイメージとなる「これができるようになりたい」、「こういう力を身に付けたい」などの目的意識をもたせる。その姿と今の自分とを比較して、課題をもたせる。初めて出会う運動では、体験してから想像したり関連付けたりして考えさせていく。

○考えを再構築する振り返り

一単位時間内において、適切なタスクに対して自分の課題や解決のプロセスに対して振り返ることで、運動して分かったことや、他者との対話によって、自分の考えを再構築できるようにさせていく。

「主体的・対話的で深い学び」の視点に基づく子供の学びの姿

○児童の実態に合った教材や場の工夫

運動の特性に触れ、運動の楽しさを十分に味わわせることができるよう、児童にとって行い方が分かりやすく、児童の実態に合った教材を選択することで、児童は興味・関心をもち、粘り強く取り組むことができる。



○課題解決の手助けとなる資料

動きのポイントと自己や仲間の動きを照らし合わせることができ資料や、課題の解決方法が示された資料を用いることで、児童は改善点を見いだしたり、新たな課題に気付いたりすることができ



○教師の働き掛け

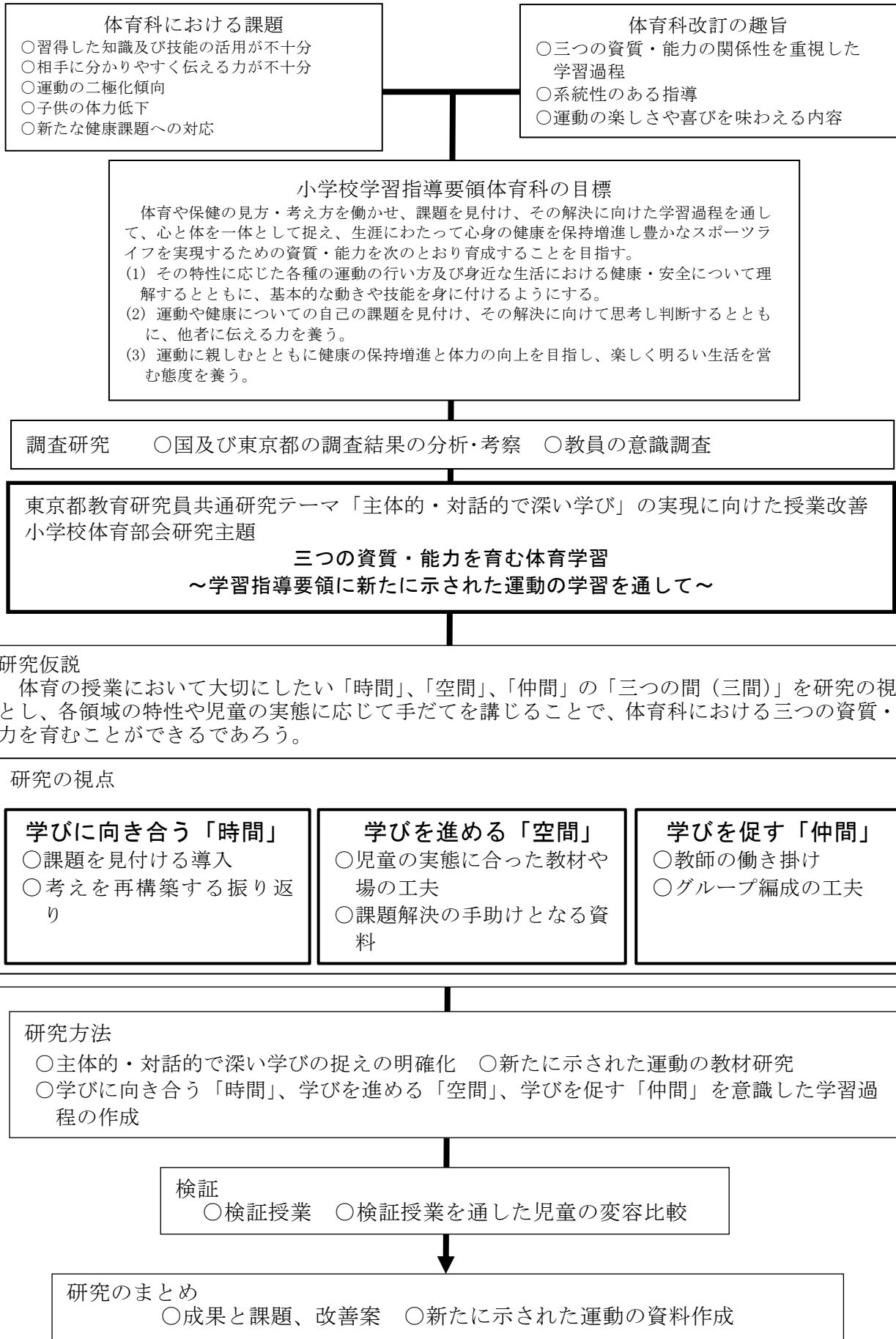
児童の学びを適切に導くために、価値のある思考や動き、学び方などを具体的に称賛したり共有したりする。問いを駆使することで、思考を活性化させたり、新たな課題に気付かせたりする。



○グループ編成の工夫

児童が自分の考えを伝え合い、考えの違いに気付いたり、課題解決のための改善点を見いだしたりすることができよう、人数や構成を工夫する。技能差を同質にし、考えを吟味・検討することができようにしたり、異質にすることで新たな課題や考えの違いに気付かせたりする。児童が対話を通して主体的に学ぶことができよう工夫する。

IV 研究構想図



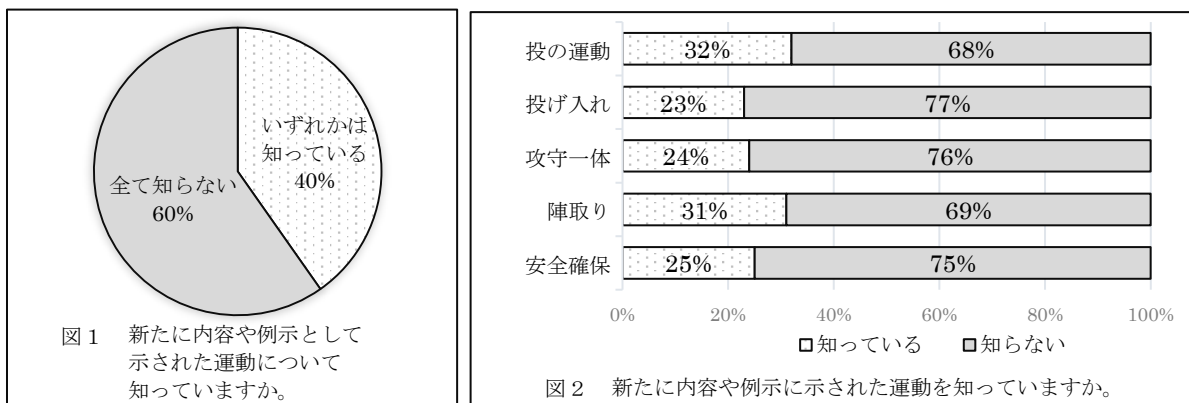
V 研究の内容

1 調査研究

小学校学習指導要領解説体育編に新たに内容や例示として示された運動についての理解や実践の現状を把握するために、都内公立小学校の学級担任を対象として質問紙調査を行った(学校数：43校、対象教員数：482名)。

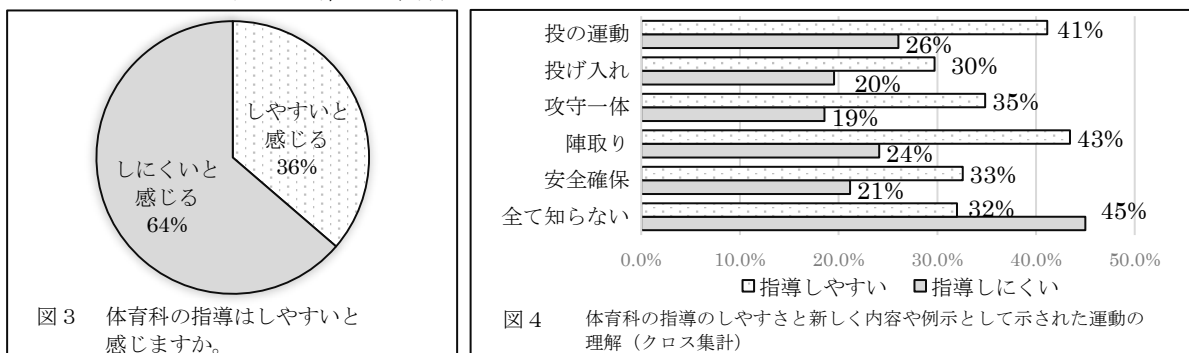
なお、「投の運動」とは陸上運動系の「内容の取扱い」に示されたもの、「投げ入れ」とは低学年ゲームに示された相手コートにボールを投げ入れるゲームの例示、「攻守一体」とはボール運動系の中学年及び高学年の例示(バドミントンやテニスを基にした易しいゲーム、天大中小など子供の遊びを基にした易しいゲーム及びバドミントンやテニスを基にした簡易化されたゲーム)、「陣取り」とはボール運動系の中学年の例示(タグラグビー、フラッグフットボールなどを基にした易しいゲーム)、「安全確保」とは水泳運動系の高学年の内容(背浮きや浮き沈みをしながら続けて長く浮くこと)を指している。

(1) 小学校学習指導要領解説体育編に内容や例示として示された運動の理解について



新たに内容や例示として示された運動について、「全く知らない」と答えた教員は60%であった(図1)。運動別に見ると、「知らない」と回答した教員の割合が、最も少ないのが「投の運動」の68%、最も多いのが「相手コートにボールを投げ入れるゲーム」の77%である(図2)。

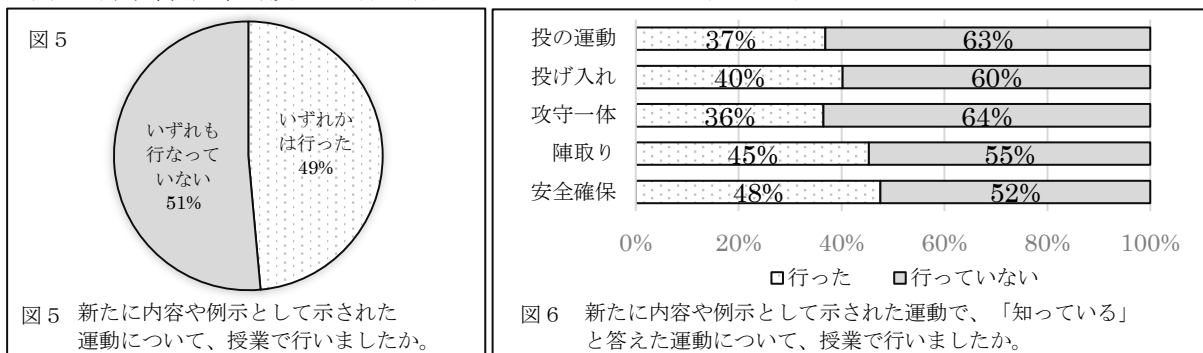
(2) 体育科の指導のしやすさの感じ方と、小学校学習指導要領解説体育編に内容や例示として示された運動の理解との関係について



体育科の指導について、「指導しやすいと感じる」と回答した教員は全体の36%、「指導しにくいと感じる」と回答した教員は64%であった(図3)。また、「指導に対する感じ方」と、「新しく内容や例示として示された運動への理解」との関係性をクロス集計したところ、「指導しにくいと感じる」と回答した教員の45%は、どの運動についても理解していなかった。各

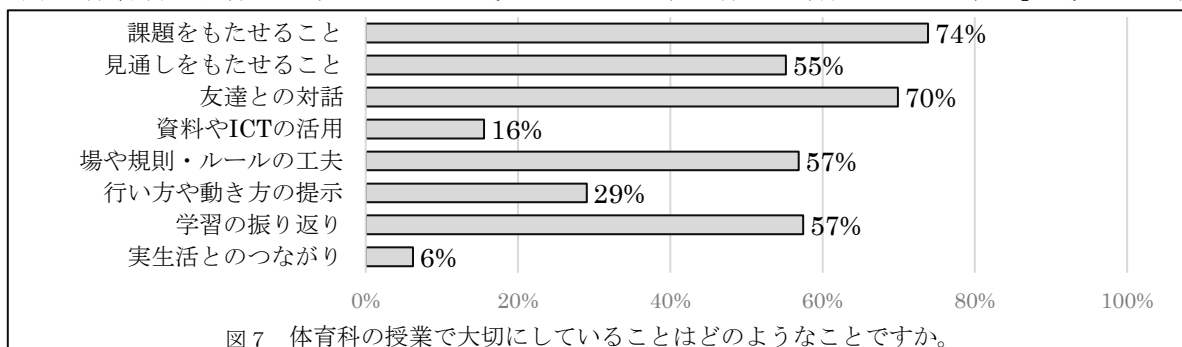
運動については、「指導しやすいと感じる」と回答した教員の中で、「知っている」と回答したのが、「相手コートにボールを投げ入れるゲーム」が29.7%と最も低く、「陣地を取り合うゲーム」が43.4%と最も高かった。一方、「指導しにくいと感じる」と回答した教員では、どの運動についても「知っている」と回答した教員の割合が10ポイント以上低くなっていた（図4）。

(3) 新学習指導要領に内容や例示として示された運動の実践について



新たに内容や例示として示された運動について、授業で実施したかどうかについては、「いずれも行っていない」と回答した割合が50%を上回った（図5）。また、新たに示された運動について「知っている」と答えた教員（図2）のうち、その運動を授業で「行った」と答えた教員については、ボール運動系の中学年及び高学年の例示（バドミントンやテニスを基にした易しいゲーム、天大中小など子供の遊びを基にした易しいゲーム及びバドミントンやテニスを基にした簡易化されたゲーム）の「攻守一体」のゲームが36%と最も低く、「安全確保につながる運動」は、48%と最も高かったが、半数に満たなかった（図6）。

(4) 体育科の授業で大切にしている観点について（「主体的・対話的で深い学び」の観点より）



体育科の授業で大切にしている観点として、「課題をもたせること」を大切にしていると回答した割合が74%と最も高かった。次いで、「友達との対話」が70%であった。「場や規則・ルール工夫」及び「学習の振り返り」は57%、「見通しをもたせること」が55%であった。

一方、「資料やICTの活用」は16%、「行い方や動き方の提示」は29%となり、課題解決の手助けとなる資料の活用や教師の働き掛けについては、他に比べ回答した割合が低かった。

これらの調査から、小学校学習指導要領が来年度から全面実施される中、新たに内容や例示として示された運動については十分に理解されておらず、あまり実践されていない現状にあることが分かった。特に、水泳の「安全確保につながる運動」については、来年度から必ず指導することとなっているため、より広く周知を図る必要がある。

そこで、小学校学習指導要領解説体育編に内容や例示として示された運動を教材として、体育科における三つの資質・能力を育む研究を行うこととした。

2 検証授業

〈ゲーム〉

1 第1学年 E ゲーム ア ボールゲーム

相手コートにボールを投げ入れるゲーム「スローキャッチゲーム」

(1) 目標

知識及び技能	ボールゲームの行い方を知るとともに、簡単なボール操作と攻めや守りの動きによって、易しいゲームをすることができるようにする。
思考力、判断力、表現力等	簡単な規則を工夫したり、攻め方を選んだりするとともに、考えたことを友達に伝えることができるようにする。
学びに向かう力、人間性等	ボールゲームに進んで取り組み、規則を守り誰とでも仲よく運動をしたり、勝敗を受け入れたり、場や用具の安全に気を付けたりすることができるようにする。

(2) 単元計画

時	1	2	3	4	5	6	
段階	規則を理解し、 今もっている力で楽しむ			攻め方や守り方を 工夫しながら楽しむ			
学習活動	1 挨拶	2 準備運動	3 場の準備	スローキャッチゲームの規則 ○シングルス（1チーム2、3名） ○ネットの高さは150cmか160cm （児童が選択） ○コート 9m×5m ○1ゲーム4分30秒 ○キャッチしたらその場から投げる。 ○サーブは「いくよ」と言葉を掛け、 「いいよ」の言葉を確認して投げ入れる。 ○得点した人が交代する。 ○相手コートに落ちたら1点			
	4 学習の進め方の確認	4 主運動につながる運動 ・フープ落としゲーム					
	5 はじめの規則の確認	5 メインゲーム① ・スローキャッチゲーム					
	6 ゲーム①	6 振り返り①（全体）					
	7 振り返り①	7 メインゲーム②					
	8 ゲーム②	8 振り返り②（チーム）					
	9 振り返り②	9 メインゲーム③					
	10 片付け	11 整理運動	12 振り返り（チーム）				13 挨拶

(3) 単元観

低学年のボールゲームの例示に「相手コートにボールを投げ入れるゲーム」が新しく示された。これは、中学年でのネット型ゲームに発展するゲームであり、型の系統性をより意識したものとなっている。低学年でネット型の特性を存分に味わわせることが、中・高学年のネット型（ゲーム）の学習を深めるポイントとなる。ネット型の特性でよく議論の対象になる一つに「つなぐ楽しさ」と「落とす、落とさせない楽しさ」がある。用具操作やはじく技能を緩和したゲームでは、「つなぐ」という挑戦課題は低学年でも初めの段階でクリアしてしまう。そこで、今回の実践では、「はじく」を除き、「投げる」、「捕る」という簡単な技能で行う投げ入れゲームにしたことで、低学年段階から「落とす、落とさせない楽しさ」を存分に味わわせることができると考えた。

(4) 運動の特性

「相手コートにボールを落としたり、自分のコートに落とさせないようにしたりしながら、得点を競い合う攻防をすることが楽しい運動」

(5) 「主体的・対話的で深い学び」を目指す授業改善の「三間」の視点

ア 学びに向かう「時間」

○ 考えを再構築する振り返り

単元を通して学習を積み重ね、学びを深めていけるように、ICT 機器を教師が活用して攻め方や守り方の振り返りを行った。例えば、たくさん得点するための攻め方として、児童から挙げた「手前に落とす」、「人のいないところに投げる」などの前時に撮影した動画を紹介して振り返り、本時に生かせるようにした。



イ 学びを進める「空間」

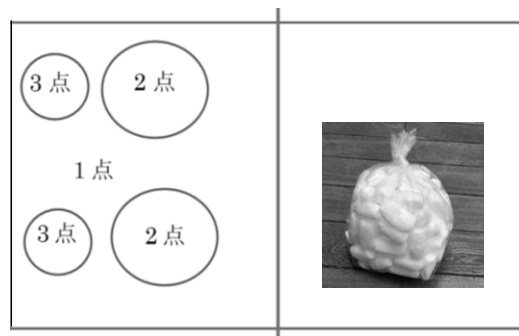
○ 児童の実態に合った教材や場の工夫

ボールは、落下速度を緩やかにするためにビニール袋に緩衝材を入れたものを使用した。袋の下の両端をテープで丸くなるようにとめ、球状になるようにした。独特の形状のボールは、当たっても痛くなく、児童が進んで運動することにつながり、主体的に学習に取り組むことができた。主運動につながる運動では、大小のフープを狙って投げて、得点を競い合うゲームを行った。投力のトレーニングとならないようにゲーム性を取り入れた。

<フープ落としゲーム>

- ①フープをねらってボールを投げる。
- ②ネットから遠い小さいフープ3点、ネットから近い大きいフープ2点、ネットを越えてフープに入らなかった場合1点として、得点した数の紅白玉を入れる。

<場の設定>



ウ 学びを促す「仲間」

○ グループ編成の工夫

技能差を異質にした2～3人の少ない人数でチームを編成し、ゲームを行った。コート内でプレーをする人数を1対1にし、得点したら交代するという規則で取り組んだ。このような設定をすることで、チームの勝利を目指し、ゲーム中に空いているスペースを伝えるなど、友達に言葉を掛ける場面を設定して対話的な学びを促した。



また、1対1のゲームにしたことで、ボールに触れる機会が保障され、より多く触球することで運動の楽しさに触れられるようにした。

2 第3学年 E ゲーム イ ネット型ゲーム

バドミントンやテニスを基にした易しいゲーム「ダンボールテニス」

(1) 目標

知識及び技能	ネット型ゲームの行い方を知るとともに、基本的なボール操作とボールを持たない時の動きによって、易しいゲームをすることができるようにする。
思考力、判断力、表現力等	規則を工夫したり、ゲームの型に応じた簡単な作戦を選んだりするとともに、考えたことを友達に伝えることができるようにする。
学びに向かう力、人間性等	ネット型ゲームに進んで取り組み、規則を守り誰とでも仲よく運動をしたり、勝敗を受け入れたり、友達の考えを認めたり、場や用具の安全に気を付けたりすることができるようにする。

(2) 単元計画

時	1	2	3	4	5	6
段階	規則を理解し、 今もっている力で楽しむ		規則を工夫して楽しむ			
学習活動	1 場の準備 2 ウォームアップゲーム					
	3 学習の進め方の確認 4 はじめの規則の確認 5 試しゲーム 6 振り返り	3 マイゲーム① 4 マイゲームタイム ・振り返り（チーム） ・規則の工夫を考える 5 マイゲーム② 6 振り返り（全体）	はじめの規則 ☆マークは「マイゲーム」*で工夫が可能 ○ネットの高さは70cm ○コート 14m×8m ○1グループ4人 ○ネットを挟んで2対2 ☆サーブはワンバウンドさせた後に打つ ☆2バウンドまで可能 ☆キャッチをしてもよい *グループで考えた規則に基づくゲーム			
	7 片付け 8 整理運動 9 挨拶					

(3) 単元観

学習指導要領体育科解説の例示に、攻守一体プレイ型のバドミントンやテニスを基にした易しいゲームが示された。ソフトバレーボールなどの連携プレイ型に比べて、味方でパスを回す意思決定をする必要がなく、相手から来たボールを直接返球したり、同じ動きを繰り返したりすることなどからゲームの行い方が分かりやすい。しかし、攻守一体プレイ型の経験がない児童にとって、相手から来たボールを、用具を使って返球し、ラリーを行うことは簡単なことではない。ネット型は、まずラリーがある程度続かないことには楽しさを感じにくいいため、児童が「相手コートにボールを返せるか、返せないかの楽しさ」を感じる事が重要だと捉えた。

この教材は、ボールの大きさや重さ、操作が易しい用具を使用するなどの工夫をすることで、経験が少ない児童にも相手コートにボールを返す楽しさを味わわせることができ、児童自身が自ら楽しめるように規則の工夫をしやすいと考えた。

(4) 運動の特性

「相手コートにボールを返せるか、返せないかを楽しみながら攻防をする運動」

(5) 「主体的・対話的で深い学び」を目指す授業改善の「三間」の視点

ア 学びに向かう「時間」

○ 考えを再構築する振り返り

ゲーム①とゲーム②の間にグループごとの振り返りを入れた。ゲーム①で困ったことやうまくいったことを振り返り、どうしたら「返せる、返せない」をもっと楽しめるのかを考え、規則を修正しゲーム②に取り組めるようにした。



イ 学びを進める「空間」

○ 児童の実態に合った教材や場の工夫

(ア) 用具の工夫

ボールは、打球速度がゆっくりで、よく弾むスポンジテニスボールを使用した。ラケットは段ボールを貼り合わせ、手にかぶせるタイプのものを児童が手作りした。

これにより、ボール操作が易しくなりラリーが続きやすくなった。また、段ボールで作成した手作りのラケットは児童が興味・関心をもって主体的に運動に取り組むきっかけとなった。



(イ) 規則の工夫

グループ内でゲームを行い、参加する全員に得点する機会が保障されるよう、視点に沿って規則の工夫を考え、オリジナルの規則である「マイゲームづくり」をした。自分たちのグループのゲームの様相に合わせ、規則の工夫をすることで、児童が主体的にゲームづくりを行うことができるとともに、ゲームの理解ができると思った。ダンボールテニスの楽しさや規則の工夫の視点を押さえたり、児童に工夫の意図を問うたりすることで規則が運動の特性から外れないようにした。

<はじめの規則>

- コート 14m×8m
- 1グループ4人
- ネットを挟んで2対2
- ☆サーブはワンバウンドさせた後に打つ
- ☆2バウンドまであり
- ☆キャッチをしてもよい

<規則の工夫の視点>

- 「みんながダンボールテニスを楽しめること」を、「みんなが相手コートにボールを返せるか、返せないかを楽しめること」とする。
- ・サーブの打ち方
- ・バウンドの回数について
- ・キャッチについて
- ・その他

ウ 学びを促す「仲間」

○ グループ編成の工夫

様々なゲームの様相に応じて規則の工夫を考えられるように、毎時間違うグループ編成にし、児童が主体となってグループごとにゲームの様相を振り返り、自分たちに合った規則の工夫を考えられるようにした。

〈陸上運動〉

1 第6学年 C 陸上運動 「投の運動」

(1) 目標

知識及び技能	投の運動の楽しさや喜びを味わい、行い方を理解するとともに、基本的な技能を身に付けることができるようにする。
思考力、判断力、表現力等	自己の能力に適した課題の解決の仕方、記録への挑戦の仕方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えることができるようにする。
学びに向かう力、人間性等	運動に積極的に取り組み、約束を守り助け合って運動をしたり、仲間の考えや取組を認めたり、場や用具の安全に気を配ったりすることができるようにする。

(2) 単元計画

時	1	2	3	4
段階	投げることを通して、動きのポイントを理解し自己の課題を見付ける			自己の課題に合った練習の方法を選び、取り組む
学習活動	1 学習内容を確認する	2 準備運動をする		
	3 投げてみる／初めの記録(得点)の測定をする	3 場の準備をする		
		4 投の運動に取り組む		
	4 カー杯投げるポイントを見付ける【全体で共有する動きのポイント】左足・上半身	5 カー杯投げるポイントを見付ける【全体で共有する動きのポイント】(第2時) 投げる前の利き腕(第3時) 投げた後の利き腕		5 自分の課題に合った練習の場を選び、取り組む「フォームをつかめ」「力強く」「リズムをつかめ」「振り返り」
		6 工夫された場の設定と行い方を知り、取り組む(第2時)「フォームをつかめ」振り向き投げ、振り子投げ(第3時)「力強く」バウンド投げ「リズムをつかめ」ステップ投げ		
5 投の運動に取り組む	7 投の運動に取り組む今日の記録を測定する		6 投の運動に取り組む／記録の測定をする	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 整理運動をする ・ 場の片付けをする ・ 振り返りをする 				


(3) 単元観

学習指導要領「内容の取扱い」に「投の運動(遊び)」を加えて指導することができることが示された。「投の運動(遊び)」は、児童の投能力が引き続き低下傾向にあることに鑑み、遠投能力の向上を意図したものである。遠くにカー杯投げることを指導の主眼に置き、投の粗形態(粗削りではあるが大まかな運動ができる状態)の獲得とそれを用いた遠投能力の向上を図ることが主な指導内容となる。記録を達成する学習活動を中心とし、児童は適切な運動の行い方に気付いたり、自己の課題を明確にしたりしながら投の粗形態の獲得と遠投能力の向上を図るとともに、カー杯投げるという楽しさや喜びを味わえるようにしたい。

(4) 運動の特性

「体全体を大きく使い、力一杯投げようとするのが楽しい運動」

(5) 「主体的・対話的で深い学び」を目指す授業改善の「三間」の視点


ア 学びに向かう「時間」 

○ 課題を見付ける導入

単元の導入では、投動作の評価が高い動き（図8）と評価の低い動きを見比べて、どのようにすれば遠くに投げられるのかを①投げる前の「左足・上半身」、②投げる前の「右腕」、③投げた後の「右腕」（右投げの場合）、といった三つの視点から考えさせた。よい動きのポイントを見つめ、児童の気づきやICT機器による映像を通して気付くことができるようにし、学級で共有できるようにした。



図8 投動作の評価が高い動きの例

イ 学びを進める「空間」 


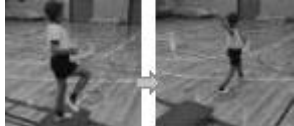

○ 児童の実態に合った教材や場の工夫


本単元では「てるてるボール」（図9）を活用することとした。ソフトボールよりも遠投距離を抑えることができ、狭い校庭の学校や体育館等の限られた広さの場でも繰り返し運動に取り組むことができた。



図9 てるてるボール
※ティーボール用12in球にタオル(40cm×80cm)を巻き、輪ゴムで結んだもの

○ 課題解決の手助けになる補助教材

行い方（右投げの場合）	
振り子投げ	両腕を大きく振って左足を前に踏み出して投げることで、右腕を後方に引いて投げることができるようにする。左足・上半身、右腕の課題解決の場として扱う。 
ステップ投げ	1・2・3のリズムで動き、1歩目に踏切板を踏み、2・3歩をケンステップに合わせて投げる。左足・上半身、右腕の課題解決の場として扱う。 
バウンド投げ	フープにボールをたたきつけるように投げ、バーを跳び越すことを目指す。右腕を振り切ることや全身で力一杯投げることの課題解決の場として扱う。 

ウ 学びを促す「仲間」 

○ 課題解決に効果的に取り組むことのできるグループ編成

課題別の練習の場では、同じ場を選んだ児童同士で学習に取り組めるようにした。このことにより、課題別の練習の場では、同じ課題をもった児童が動きを見合うことで伝え合いの視点がより明確となり、対話が活発になった。また、投動作の体験場面や記録の測定では、単元を通して同じグループで見合うことにより、よい動きを再認識できたり、課題を解決するためのアドバイスをし合ったりすることができた。

〈水泳運動〉

1 第5学年 D 水泳運動 ウ 安全確保につながる運動

(1) 目標

知識及び技能	水泳運動の楽しさや喜びを味わい、その行い方を理解するとともに、手や足の動かし方や呼吸動作などの基本的な技能を身に付けるようにする。
思考力、判断力、表現力等	自己の能力に適した課題の解決の仕方や記録への挑戦の仕方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えることができるようにする。
学びに向かう力、人間性等	運動に積極的に取り組み、約束を守り、助け合って運動をしたり、仲間の考えや取組を認めたり、水泳運動の心得を守って安全に気を配ったりすることができるようにする。

(2) 単元計画

時	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
段階	泳法の行い方及び手や足の動かし方と呼吸動作を理解し、自己の課題を見付ける					自己の課題を設定し取り組み、解決する					
学習活動	○集合・整列・挨拶 ○水泳運動の心得の確認 ○パディの確認 ○準備運動 ○シャワー・足洗 ○入水 ○水慣れ										
	教材との出会い (オリエンテーション)	〈安全確保につながる運動〉 空気を溜めた状態での肺・浮き具等の浮力を用いて呼吸を確保する運動と簡単な背泳ぎを身に付ける。 【どうしたら長く浮くことができるのか】 ・設定した課題を解決していく。 ・仲間と共に解決するための方法を考える。			安定した呼吸の獲得をねらいとする〈安全確保につながる運動〉課題とする背泳ぎか浮き沈みでの呼吸獲得		クロールか平泳ぎか、どちらが自己の課題になるかを見付け、第6時から設定した課題を解決していく。		クロールか平泳ぎで自分の課題に合った場や練習を選んで泳ぐ。		(振り返り) 学習のまとめとして単元を通してできるようになったことを確認する。
	【どうしたら長く浮くことができるのか】 背泳ぎや浮き沈みがどのくらいできるのかを知り、できるようになりたい自己の課題を設定する。	できるようになったことを振り返り、次時にどのようなことを課題とするのかを考える・自分と仲間の考えのよさを伝え合う。					課題を解決したら、新しい課題を設定し、その解決に向けた方法を考える。振り返りでは、取り組んでみてできるようになった成果や次時の課題を考える。				何ができるようになったか考える。
	○パディで健康観察 ○学習の振り返り ○整理運動 ○シャワー										

(3) 単元観


高学年の水泳運動は、「クロール」、「平泳ぎ」及び「安全確保につながる運動」で内容を構成している。低学年の水遊びで水に慣れ親しむことや中学年のもぐる・浮くなどの経験を通して、十分に呼吸の仕方を身に付けておくことが大切である。「安全確保につながる運動」は、そのような安定した呼吸の獲得を意図した運動である。高学年では、水泳運動の楽しさや喜びを味わい、その行い方を理解するとともに、手や足の動かし方や呼吸動作などの基本的な技能を身に付けるようにし、中学校での水泳の学習につなげていくことが求められている。

小学校学習指導要領解説体育編に新しく内容として明記された「安全確保につながる運動」を学習することで、児童が安定した呼吸を獲得し、それが「クロール」や「平泳ぎ」などの泳法の獲得だけではなく、水難事故から自分を守るための力を高める上で重要であると捉えた。

(4) 運動の特性

「安定した呼吸を伴うことで、心地よく泳いだり、泳ぐ距離や浮いている時間を伸ばしたりすることが楽しい運動」

(5) 「主体的・対話的で深い学び」を目指す授業改善の「三間」の視点


ア 学びに向かう「時間」 

○ 考えを再構築する振り返り

毎時間の中で、よい動きや練習の仕方などについて友達と話し合ったり、動きを見合ったりして交流することで、考えを深めることができる場面を設定した。学習のまとめでは、児童が一単位時間の中で取り組んできた課題を互いに見合い、本時の学習で、どれだけ記録等が伸びたかを振り返ることができるようにし（図 10）、次時に向けて新たな課題を見付けることができるようにした。


また、単元後半の段階では、単元前半の学習を振り返らせ、「安全確保につながる運動」、「クロール」、「平泳ぎ」の三つの運動から、自分の力に応じた課題を設定できるようにした。

なお、水泳運動では、学習カードが活用しづらい環境であることを考慮し、秒数や回数を指標として提示し、運動を振り返りやすくした。児童が指標をもつことで、自己の成長や課題に気付きやすくなるよう工夫した。

イ 学びを進める「空間」 

○ 課題解決の手助けとなる資料

プールという環境においては、水中で児童が活動する際に指示が通りにくいという場合がある。そこで、ねらいや工夫の視点などを視覚的に提示することで、児童が様々な運動の取り組み方に気付いたり課題を再構築したりするなど、自己の課題解決に向かいやすくなるようにした（図 11）。

ウ 学びを促す「仲間」 

○ 教師の働き掛け

児童が安心して学習に取り組める環境を設定するとともに、ティーム・ティーチングを実施している教師同士が連携し、課題解決に向けたよい取組やよい動きを価値付けられるようにする。

T1	全体指示をするとともに、よい動きについて価値付ける。(陸上にいる教師の役割)
T2	児童に発問することで、児童の気付きを促したり、全体で取り上げるよい動きの児童を取り上げたりする。(水中にいる教師の役割)
T3	安全管理をするとともに、個別で児童に発問することで、児童の気付きを促したり、全体で取り上げるよい動きの児童を取り上げたりする。(陸上にいる教師の役割)




図 10 学びの成果を振り返る例

図 11 ねらいや工夫の視点などを視覚的に提示する例


VI 研究のまとめ

1 成果

(1) ゲーム


○相手コートにボールを投げ入れるゲーム（学びを促す「仲間」）

グループ編成の工夫により、「落とす、落とさせない」というネット型の特性を味わい、夢中になって取り組む姿が見られた。特に、落とさせないために落下地点に入るボールを持たないときの動きが多く見られた。

○バドミントンやテニスを基にした易しいゲーム（学びを進める「空間」）


規則の工夫の視点を示したこと、ゲーム時間とチームごとにゲームの様相を振り返る時間を確保したことで、それぞれのチームが、みんなが楽しめる規則を主体的に考えて運動に取り組む姿が見られた。

(2) 陸上運動

○投の運動（学びを進める「空間」）

高学年における実践では、技能分析に基づいた課題解決の場を設定したことで、遠投能力の向上に向け、主体的に自己の課題解決を目指して運動に取り組むことができた。


(3) 水泳運動

○安全確保につながる運動（学びに向かう「時間」）


安全確保につながる運動の必要性を理解させることで、児童が「安定した呼吸を伴って続けて長く浮くこと」に課題意識をもって取り組むことができた。

2 課題

(1) ゲーム


○相手コートにボールを投げ入れるゲーム（学びに向かう「時間」）

計画的に作成した学習課題（教師の指導性）と児童の必要感から生まれる学習課題（児童の主体性）との擦り合わせが必要である。

○バドミントンやテニスを基にした易しいゲーム（学びを進める「空間」）



運動の特性を味わうために必要な技能と、第3学年児童の発達段階における技能とのギャップが見られた。6年間の系統性を明らかにし、第3学年児童の発達段階を踏まえた上で、教材や規則の工夫などにより、更に易しいゲームにする必要がある。

(2) 陸上運動

○投の運動（学びに向かう「時間」）

高学年の課題解決に向けた学習においては、記録の伸びが実感できるような単元計画を工夫する必要がある。また、授業の始めと終わりには、球形のボールを投げる時間を設けることも考えられる。

(3) 水泳運動

○安全確保につながる運動（学びを進める「仲間」、学びに向かう「時間」）

仲間と共に課題解決を図る場面では、学びを促すために児童一人一人の役割を明確にする必要がある。また、児童が「安全確保につながる運動」、「クロール」、「平泳ぎ」をバランスよく身に付けることができるよう、指導計画を作成する必要がある。

平成 31 年度(2019 年度) 教育研究員名簿

小学校・体育

学 校 名	職 名	氏 名
港 区 立 港 南 小 学 校	主任教諭	世取山 拓 平
江 東 区 立 浅 間 豎 川 小 学 校	主任教諭	関 川 祐 亮
品 川 区 立 台 場 小 学 校	主幹教諭	竹 元 亮 介
大 田 区 立 梅 田 小 学 校	主幹教諭	眞 舘 良 晴
渋 谷 区 立 笹 塚 小 学 校	主任教諭	望 月 心
杉 並 区 立 杉 並 第 一 小 学 校	主任教諭	○堀 河 健 吾
杉 並 区 立 井 荻 小 学 校	主任教諭	内 田 広 志
北 区 立 西 浮 間 小 学 校	主任教諭	○村 山 巧
荒 川 区 立 第 一 日 暮 里 小 学 校	主任教諭	松 本 晃 和
練 馬 区 立 大 泉 学 園 小 学 校	主幹教諭	長 瀬 育
江 戸 川 区 立 新 田 小 学 校	主幹教諭	◎石 井 幸 司
八 王 子 市 立 緑 が 丘 小 学 校	指導教諭	平 澤 彬
三 鷹 市 立 第 六 小 学 校	主任教諭	小 山 裕 也
東 村 山 市 立 野 火 止 小 学 校	主任教諭	福 井 佑 太
清 瀬 市 立 清 瀬 第 四 小 学 校	主任教諭	横 山 賢 作

◎ 世話人 ○ 副世話人

〔担当〕 東京都教育庁指導部指導企画課
指導主事 田中 純子

平成 31 年度 (2019 年度)
教育研究員研究報告書
小学校・体育

令和 2 年 3 月

編 集 東京都教育庁指導部指導企画課
所 在 地 東京都新宿区西新宿二丁目 8 番 1 号
電話番号 (03) 5320-6849